

## 令和5年度青少年の体験活動推進企業表彰 〈審査結果〉

### 【表彰の概要】

この表彰は、社会貢献活動の一環として青少年の体験活動に関する優れた実践を行っている企業を表彰し、全国に広く紹介することにより、青少年の体験活動の機会の推進を図ることを目的としています。

### 【審査及び受賞企業決定の流れ】

応募いただいた69件(大企業48件、中小企業21件)の中から、審査委員会による審査のうえ、特に優れた実践を行った企業を「優秀企業」、顕著な取組を行った企業を「特別賞」、今後の取組に期待ができる企業を「奨励賞」として決定しました。

優秀企業によるプレゼンテーション・最終審査および表彰式を令和6年2月22日(木曜日)に開催し、「文部科学大臣賞」、「優秀賞」を決定しました。

また、特別な支援や配慮を要する青少年(障害・不登校・特異な才能・日本語指導等)のための取組や、特別な支援や配慮について理解を深めるための取組のうち、顕著な取組を行った企業に対して贈られる「特別賞(スペシャルニーズ賞)」(令和4年度創設)に加え、今年度は「特別賞(連携賞)」を新設しました。

この「特別賞(連携賞)」(令和5年度新設)は、企業が主催し青少年教育団体等と計画段階から密に連携して行った取組のうち、顕著な取組を行った企業に対し贈られる賞です。

### 【受賞企業】

#### ■ 文部科学大臣賞(2企業)

大企業部門:森ビル株式会社 / 中小企業部門:管清工業株式会社

#### ■ 優秀賞(8企業・50音順)

NECネットエスアイ株式会社、株式会社阪急阪神百貨店、株式会社日立システムズ、株式会社毛髪クリニクリーブ21、サントリーホールディングス株式会社、パーソルキャリア株式会社、パナソニック株式会社、有限会社Fire Works

#### ■ 特別賞(スペシャルニーズ賞)

ソニー生命保険株式会社

#### ■ 特別賞(連携賞)

オリンパス株式会社

#### ■ 奨励賞(15企業・50音順)

ALSOK(総合警備保障株式会社)、アクセンチュア株式会社、荒川化学工業株式会社、井関産業株式会社、大阪ガスネットワーク株式会社、株式会社キッズスター、株式会社グリーンズ、株式会社マルイ、資生堂ジャパン株式会社、日本新薬株式会社、ネットトヨタ仙台株式会社、ノアインドアステージ株式会社、ピジョン株式会社、三菱ケミカル・クリンスイ株式会社、第一フロンティア生命保険株式会社/ノアインドアステージ株式会社/株式会社みつヴィレッジ/

### 【審査委員】(50音順)

- 明石 要一 氏(千葉大学名誉教授)
- 黒崎 裕之 氏(日鉄エンジニアリング株式会社 取締役常務執行役員)
- 笹谷 秀光 氏(千葉商科大学基盤教育機構 教授)
- 野口 和行 氏(慶応義塾大学 教授)
- 比嘉 里奈 氏(公益社団法人日本PTA全国協議会 副会長)
- 松田 恵示 氏(独立行政法人国立青少年教育振興機構 理事)
- 矢尾板 初美 氏(有限会社人事・労務 パートナー行政書士)

## キーワードを大切にしよう

文部科学省が「青少年の体験活動推進企業表彰」を行ってきて10年がたつ。今回も多くの企業がエントリーしてくれた。69件である（大企業48件、中小企業21件）。コロナ禍の影響がありながらも昨年より数が増えている。敬意を表したい。

書類審査を経て令和5年12月に、最終審査に進出する上位10件と特別賞2件、奨励賞15件を決定した。上位10件は2月22日国立オリンピック記念青少年総合センターでプレゼンを行った。



文科大臣賞は、大企業部門では森ビル株式会社の「ヒルズ街育プロジェクト」、中小企業部門では管清工業株式会社の「楽しく学ぶ！水のじゅんかん」が選ばれた。

森ビルは第1回から参加している。今回悲願を達成した。一貫して「街育」というキーワードを掲げて活動を推進してきた。今回高く評価されたのは活動が一日短期完成型でなく、街づくりに重要なテーマ「安全」「環境」「文化」という複数の視点から継続型のプログラムを実施したことである。大都市の中で子供参加型の街づくりが注目を浴びた。

管清工業は、目に見えにくい下水道に注目した。[水はどこから来て、どこへ行くの? ]という子供の素朴な疑問に答えようとした活動である。大人でも理解しがたい下水道を映像だけでなく、クイズや実験を交えながら出前授業を行っている。とりわけ、「めぐるめぐみ」という水の循環が学べるオリジナルのボードゲームの開発が高く評価された。

サントリーの「次世代環境教育“水育”」も高く評価された。ここも第1回から参加している老舗である。もう少しというところである。次回に期待したい。中小企業の有限会社FireWorkの「さいたま KIDS 郷育 MOVIE プロジェクト」も健闘した。映画作りを通じて故郷を知り、次世代を担う人材の育成を目指した活動である。「郷育」問うキーワードを問題提起として掲げている。

活動を絞ってほしい。拡散するより、一点豪華の方が伝わる。次に、ないものねだりではあるが「街育」「水育」「郷育」というようなキーワード（哲学的なもの）が編み出されるといい。素朴でもよい。独自のこだわりを求めたい。期待している。

## 持続可能な社会に向け、『わが社ならでは』の貢献を

弊社は、昨年度表彰をいただいたご縁で、審査員という立場で参加させていただきました。

各社の活動には、青少年の目線に立った工夫、地元自治体との連携、経営陣や社員の巻き込み方など、私自身にとっても参考になるポイントが多々あり、大いに刺激を受けました。また、本業と関連性の強い「その会社ならでは」のオリジナリティあふれる努力や工夫がなされていたことが印象的でした。



質量ともに大変レベルが高く、書類審査さらには最終審査と接戦で、審査委員同士の議論も熱がこもったものとなりました。

その中でも、特に優れた取り組みとして文部科学大臣賞を受賞された二社について、コメントさせていただきます。

森ビル株式会社は、都市づくりのプロとして“街育”事業を展開してこられました。街を舞台に環境、アート、安全・安心などを学ぶカリキュラムは大変丁寧に作り込まれており、アンケート結果や新たな視点などを踏まえ、プログラムをブラッシュアップし続ける姿勢も共感を得ました。管清工業株式会社は、下水道管路維持管理業界のパイオニアとして、水の循環を学ぶことができる出前授業を継続的に実施してこられました。下水管の径の大きさや、「なぜティッシュをトイレに流してはいけないか？」など大人でも興味を持つようなクイズやボードゲームなどの創意工夫が高く評価されました。

また、いずれも、自分たちの仕事の価値を青少年や地域に伝えたい、体験してもらいたいという情熱が伝わってくるものでした。

本表彰は、国連の持続可能な開発目標（SDGs）の目指す姿に通じるものと理解しております。社会の課題を解決することでその価値を認められ、社会に貢献しながら存続することができる企業だからこそ、次世代を担う青少年たちに有意義な体験を提供できる可能性は大きいものと考えます。私たちも、企業社会の仲間として、ともに活動を深化させていきたいと改めて思いを強くいたしました。

今回受賞されたみなさま、そして今後の受賞を目指すみなさまの益々のご活躍をお祈りいたします。

## それぞれの花を咲かせるために

文部科学大臣賞を受賞した森ビル株式会社、管清工業株式会社をはじめ、優秀賞、奨励賞を受賞された企業の皆様に心よりお祝いを申し上げます。また、今回エントリーしてくださった大企業部門 48 社、中小企業部門 21 社の皆様に、青少年の自然体験活動に携わる一員として、深く感謝申し上げます。

森ビル株式会社の取り組みは、創業から約 60 年間にわたり地域の方々と共に街づくりを推進し、そこで培われたノウハウを生きた教材として活用した体験学習プログラムを更に発展させ、全 5 回にわたり複数の視点から「より良い未来の街」を考える中期探究プログラムや、オンラインコミュニティを活用したコミュニケーションの創出など、リアルとオンラインを組み合わせながら継続的な学びの機会を提供していることに深く感銘いたしました。また、管清工業株式会社は、下水道の仕組みと生活のかかわりに関するクイズや実験、さらには水の循環が学べるオリジナルボードゲームを活用した出前授業を展開し、重要なインフラでありながら普段はあまり脚光を浴びない下水道の重要性について、本業の強みを活かした他の中小企業にとってお手本となるような体験活動プログラムでした。

令和 5 年度は、特別賞としてスペシャルニーズ賞に加え、青少年団体等と企画段階から密に連携して行った取り組みに対して表彰する連携賞が新設されました。スペシャルニーズ賞を受賞したソニー生命株式会社の取り組みは、「毎月の生活費」「家族の夢」など子供自身が立てたライフプランに基づきライフプランニングとその実現のためのお金の流れなどを体験的に学習できるプログラムを、特別支援学校や日本語を母語としない子供たちを対象に、その特性に応じた教材の工夫やそれぞれの子供たちが抱える課題に対応させたことが高く評価されました。連携賞を受賞したオリンパス株式会社は、がんなどの診断・治療に用いられる内視鏡を教材に、その前身となる胃カメラ誕生の経緯とその後の技術発展、病気の早期発見・早期治療の重要性について、実際の内視鏡や処置具の操作体験などを、全国に先駆けて市内全 38 校の中学校に対してがん教育を実施している八王子市教育委員会と連携して、さらに効果的なプログラム開発に取り組んでいることに、これからの発展性を見出すことができました。

全体を通して、40 社以上の皆様が初エントリーとなり、青少年の健全育成を目的とした体験活動を提供する企業が広がりを見せてきたことを、大変嬉しく思います。そして、複数回エントリーいただいている企業の皆様が、実践を重ねていく中で、それぞれの事業をさらに深めて頂いていることに深く感謝申し上げます。体験活動は、子供たちがこれから様々な学びをするための土台、土壌であると思います。そして、企業の皆様の取り組みが広がり、深まること、学校、地域、青少年団体等が密接に連携していくことで、その土壌はさらに豊かになっていきます。

子供たちがその豊かな土から芽を出し、多様な学びの機会の中で育ち、それぞれの花を咲かせることが、これからますます複雑化していく社会の中でしなやかに自身の力を発揮し、よりよい社会づくりにつながると確信しています。



## 社会を生き抜く力

青少年の体験活動の推進を図ることを目的とした、青少年の体験活動推進企業表彰に応募いただいた企業は、自社の強みを活かし、積極的に教育のCSR活動に参画し、企業の社会的評価を高め新たな社会価値の創造に期待できるものでした。

青少年の主体的・対話的で深い学びの実現には、よりよい生活を創り出す力が身に付く体験活動が影響を与えたいと思います。今回も、大きく変化している社会情勢の中であっても、企業の努力により実現された体験活動の取り組みは、青少年の貴重な学びの場となりました。

特に、今回文部科学大臣賞を受賞された森ビル株式会社と管清工業株式会社は、共に2007年から事業に取り組みはじめ、長い時間をかけ、社内理解だけではなく、地域との連携により、地域の活性にも力をつくしてきたことが伺えました。森ビル株式会社は、街の魅力や都市づくりのノウハウを楽しみながら伝え、自分で考える力を身につける出前授業を取り入れる体験型の内容でした。管清工業株式会社は、正しい知識で適切に下水道を使用してもらい、川や海の汚染や生活への悪影響を防ぎ、オリジナルボードゲームを利用し主体的に学べる内容でした。

生まれてから青少年へ、そして大人へと、私たちは生きていくだけで毎日が学びの時ですが、そこに、企業が質の高い多様な体験活動を提供することで、青少年には本当の意味で、自分で考え自分で決断できる真の生きる力も、身につけさせてあげることができるのだと思っています。

今回も、応募いただきプレゼンテーションを拝見できた全ての企業からは、青少年の深い学びと健全育成につながる実践が、未来へと脈々とつなげられていくことがわかりました。体験活動のねらいや目的だけではなくその特性や特徴も含め、紙面からだけではわからないことが改めて伝わってきました。私たちが知り得ていない社会貢献活動の一環として実践されている体験活動が、青少年の重要な経験となっていることがより理解できました。これからも、このプレゼンテーション能力を活かし、引き続き、各企業には青少年の豊かな実りある体験活動を、広く社会に広めていただきたいと思います。



### 「体験」と「経験」の違いに引き寄せて

「青少年の体験活動推進企業表彰」にご参加くださった皆様方の取り組みに触れることができ、自分にとってもワクワクドキドキの、大変充実した時間を持つことができました。

文部科学大臣賞をはじめとするいくつかの受賞された取り組みは言うに及ばず、「企業」という組織の特性や風土が活かされ、体験を提供するという大きなビジョンを共有した取り組みの具体的な姿は、教育という問題だけではなく、社会全体の活力を感じるものでもありました。コンペティターであるとともに同志でもあるこのような公共性の高いネットワークが、来年以降もさらに発展することを心から願っております。



提供されているものは「体験」なのですが、いつもこの言葉を巡って考えることがあります。それは、よく似た言葉なのですが「経験」という言葉との違いです。

社会学者の作田啓一先生は、「生成の社会学を目指して」という著書の中で、僕の言葉に置き換えてしまいましたが、この違いを「流れゆくその真っ只中にある時間や場そのもの」=体験と、「そのような体験が終わって、頭の中で意味付けられたり価値づけられたりした出来事」=経験として説明されています。つまり、何も考えずにただ没頭して取り組んでいるのが「体験」で、それが終わった後に自分自身や他の人が振り返ったり評価したりして、語れるようになっている状況が「経験」という区別です。なので、「体験」は幾分、不条理なものを含んでいますし、計画以外のことも多々起こります。しかし、だからこそ自由に取り組めばいいし、時に失敗したって構わないわけです。

今回のプレゼンテーションで僕が関心を持っていたのは、特に「経験」として語られている内容よりも、むしろ、このような取り組みの中でひき起こっている、子どもたち、実施されている企業の皆さん、あるいは連携されている地域や学校の皆さんが味わわれた「体験」の中身や質に関してでした。「うわっー!」とか「なんで、なんで?」とか「面白い!」とか「失敗しちゃった!」など、整理される前の五感を使い身体全体で感じている様子そのものでした。

企業が動くからこそ提供されるこのような新しい体験との出会いが持つ教育的可能性は、正直、計り知れないものがあると思います。

創造力やレジリエンスなどの力が「体験」の豊かさを通して生まれ、社会全体の活力を生み出してくれるように、ご一緒に考え、また実践できればと思います。

多くの企業の皆様がさらにご参加くださることを願いつつ、来年もまたどうぞよろしく願います。

## 子どもたちの主体性を育む、身体性の伴った つながりの場を地域社会に

多くの企業の皆さまが、それぞれの強みを活かしながら、次代を担う子どもたちの主体性を育む体験活動に真摯に取り組む姿勢と、その熱意に感動するとともに、心から敬意を表します。



プレゼンテーションに進まれた優秀企業の皆さまにおかれましては、創意工夫を重ねた多岐にわたる取り組みに、多くの学びと気づきを頂きました。多様なステークホルダーとの連携から生まれる、人と人、人と地域、人と自然といった、さまざまな関係性の醸成と、子どもたちの主体性の高まりを感じる体験活動であることが評価されました。

その中でも、文部科学大臣賞を受賞された「森ビル株式会社」さま「管清工業株式会社」さまの展開する体験活動は、より暮らしに根付いた、身体性の伴ったつながりを体感できるものであったと思います。

令和6年1月1日石川県能登半島で起きた、最大震度7の揺れを観測する地震で、建物の倒壊や津波の被害、上下水道の断絶も長期間に及びました。

生きることと自分たちの働き、そして、地域社会が密接につながっていることを思い出させてくれる両社の取り組みは、高く評価されたとともに、社員一人ひとりが自分たち事として捉え積極的に取り組む姿勢、そして、子どもたちの当事者意識を醸成し主体性が発揮された様子が強く印象に残っています。

近江商人の「三方よし」は、「売り手よし、買い手よし、世間よし」。日本では「三方よし」の概念をみればわかるように、社会性がすでに事業のうちに内在していました。

VUCA の時代と言われ、不確実性・複雑性の高い絶対解のない現代において、社員はもちろんのこと、取引先や地域住民など、多様なステークホルダーと手を取りながら、企業独自の共通善を創造していくことが、持続的な経営を実現する上でも大切になってくると考えています。

弊社においては、“身体性の伴ったつながりの場及び地域の持続的な健全性を探究していく営み”を『コミュニティ経営』と掲げ十数年取り組んで参りましたが、青少年の体験活動を実施することが、より多くの企業の在り方として浸透してくように、私どもも引き続き尽力して参ります。